米国から「独立自尊のすゝめ」

武内 宏樹

2019年も暮れようとしているが、米国では「グローバリズム」に対する「怒り」が吹き荒れ、ナショナリズムが席巻した年であったと改めて思う。一方、外資系企業の海外直接投資を誘致し、自由貿易や移民の増加、人種の多様性という、まさに「グローバリズム」の恩恵を受けている米国南部では、NAFTA（北米自由貿易協定）物流の「扇の要」であるダラスをはじめ、ヒューストン、アトランタといった大都市を中心に、「反グローバリズム」に対する「怒り」も噴き出している。

保護貿易や移民規制の強化、人種差別を煽るような政策によって、ドナルド・トランプ大統領は引き続き、過半数には程遠いものの、40％近い岩盤支持者を確保している。一方、民主党の大統領選予備選に立候補している候補者の多くも、バーニー・サンダース氏やエリザベス・ウォーレン氏を筆頭に、保護貿易や多国籍企業への規制強化といった経済ナショナリズムではトランプ政権と軌を一にしている。その結果、トランプ政権の「反グローバリズム」に辟易している人たちは、来年の大統領選挙に向かって自分たちの候補者を見出せずにいる。そんななか、民主党から大統領選挙に立候補している実業家のアンドリュー・ヤン氏は、労働者の職を奪っているのはITやロボット技術の進展といったオートメーションであると主張し、貿易や移民をスケープゴートにする経済ナショナリズムを批判している。政治経験はないものの、政策論議では最も的を射た主張を展開しており、今後どこまで支持を伸ばせるか期待しながら見守りたい。

福沢諭吉は、1900年に発表された29カ条の「修身要領」第2条で「心身の独立を全うし自から其身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの、之を独立自尊の人と云う」と述べ、さらにこれより先に著した『学問のすゝめ』3編第1条では、「独立の気力なき者は、国を思うこと深切ならず」と浅薄なナショナリズムを糾弾している。すなわち、第2条で「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人に諛（へつら）うものなり。常に人を恐れ、人に諛う者は次第にこれに慣れ、その面の皮（かわ）鉄の如くなりて、恥ずべきを恥じず、論ずべきを論ぜず、人をさえ見ればただ腰を屈するのみ」と断じた後、「独立自尊」の気概を持たない人は「目上の人に逢えば一言半句の理屈を述ぶること能わず、立てと言えば立ち、舞えと言えば舞い、その柔順なること家に飼いたる痩犬の如し」とたたみかけている。

目下、香港での民主化を求める抗議運動が世界の耳目を集めているが、その対応をめぐって米国の大学では留学生間の応酬が凄まじい。今年10月26日付のニューヨーク・タイムズ紙に掲載された“Hong Kong Protests Spread to U.S. Colleges, and a Rift Grows”という記事によると、ボストンにあるエマーソン大学に通う香港出身のフランシス・フイさんは、学内の新聞に“I am from Hong Kong, not China”と題する記事を書いたところ、フェイスブック上で中国人留学生から“Whomever opposes my greatest China, no matter how far they are, must be executed（偉大なる我が中国に歯向かうものには、どこにいようが死刑を宣告する）”という書き込みをされ、身の危険を感じたという。

また、筆者が教鞭を執るサザンメソジスト大学（SMU）で開催された香港デモについてのシンポジウムで、デモを支持する香港中文大学の教授に対して「なんであんな嘘を信じるのか」と罵倒する中国人留学生がいた。一方、筆者は習近平政権から見た香港デモを論評したのであるが、おもしろいことに中国人留学生からの質問は皆無であった。要は、表現の自由がある香港の動静は把握できても、中国共産党の支配体制の実態はまったくわかっていないのである。

2016年の大統領選挙において、ヒラリー・クリントン氏はトランプ支持者のことを「嘆かわしい」（deplorable）と言って大問題となったことが思い起こされる。選挙戦略としてはまずかったが、言い得て妙だと思ったものである。筆者に言わせれば、“my greatest China”などと宣っている中国人留学生は、「党に依頼し、党を恐れ、党に諛う」情けない痩犬の如しである。

米国と中国で「嘆かわしい」ナショナリズムが台頭している時代であるが、こんなときだからこそ、日本が「独立自尊」の気概を持って、ドイツ、フランス、カナダといったミドルパワーと連携しながら、「グローバリズム」の旗手を担うことを期待したいものである。

サザンメソジスト大学（SMU）准教授